

『河海抄』の研究(六)

—— 第一卷(二) ——

徳 満 澄 雄

今回は、前号に引き続き、第一卷「桐壺」卷の三番から二十二番の注釈に検討を加えてみたい。

〔本文〕

〔三〕 いとやむごとなききはにはあらぬが

〔ア〕 「無止事」なり。又、「無停事」なり。

〔イ〕 「花容無止」万葉

〔四〕 すぐれてときめき給(ふ)ありけり

〔ア〕 「絶妙」日本紀「時」^{トキメク}同

〔イ〕 「めく」はよみつくる「てには」なり。「生」^{日本紀}をも「なまめく」とよめり。又、「人めく」「春めく」などもいへり。

〔五〕 めざましきものに

〔ア〕 「暁目覚草」^{ノメサマシクサ}万葉 『奥入』『水原抄』等にこれを載す。

不審なり。

〔イ〕 これを案ずるに、この義、別の事なり。『詩』に「冷眼」とこの心を作るなり。たとへば、すさまじく見たるなり。そねみたる様なる心なり。

〔六〕 おとしめ^猜そねみ給(ふ)

〔ア〕 「劣」、「陷」の心か。

〔七〕 いとあづしくなりゆき

〔ア〕 『後漢書』にいはく、「生男ハ狼ノ如シ。ナホ、ソノ^{アツ}厓シカランコトラ恐ル。生女ハ鼠ノ如シ。ソノ武ヲ恐ル」

〔イ〕 伊弉諾尊神功既畢タマヒテ^{カミコトラヘ}靈運^{アツイタマフ}当遷テ(『日本紀』第一、『先代旧事本紀』ニコノ四字ヲ「ミイチャカリシマシニキ」ト点ゼリ)。

〔ウ〕 又、「劣」或ヒハ「厓」。或ヒハ「支離」^{アツシ}ト言フ。(弱故ヲ厓

トイフ。順『和名』

(エ) 定家卿説にいふ、「あやうき心なり。云々」

(オ) 『日本紀』の如くば、病(など)の事なり。大都是同じ心か。

〔八〕 かむだちめうへ人

(ア) 上達部、殿上人なり。

〔九〕 あいなうめをそばめつつ
無愛

(ア) 『史記』ニ曰ク、「時人、都ヲ見テ目ヲ側メテ、蒼鷹ト号ス。

「都」の右傍に「郅都なり」と注する

(イ) 『莊子』注曰、「桀・紂何得守斯位而放其毒、使天下側目哉也」第十胠篋

(ウ) 「末容君王得見面已被楊妃遙側目」樂府・上陽人

(エ) 「京師長吏為是側目」長恨歌伝・陳鴻

〔一〇〕 もろこしにもかかる事のおこりにこそ
起一説矯

(ア) 殷の紂は妲己を愛し、周の幽王は褒姒を寵して、天下を乱る。唐の玄宗の楊貴妃にいたるまでもその例多し。
眞本ナシ

〔一一〕 あめのした

(ア) 「御宇」日本紀 「御禹」同 「宇内」同 「天下」同 「御

宇天下」同 「率土」周礼 「天表」遊仙窟
アメウチ

〔一二〕 あぢきなう

(ア) 「無為」史記高紀・白氏文集・古語拾遺・老子経 「無道」日本
アチキナシ

紀。この心か。 「無状」同 「無事」遊仙窟 「何須」
アチキナシ ナシ アチキナシ

同 「无情」同 「無端」舍利講式・解脱上人
アチキナシ 不本眞本ナシ

〔一三〕 いとはしたなきこと

(ア) 「無半事」伊勢物語真名本

(イ) 同物語注に云ふ、「『はしたなし』とはたらぬ事もなきなり。
不足
物の不足にたらぬを『はしたなる』と云ふなり。云々」

〔一四〕 御心ばへのたぐひなきをたのみにてまじらひ給(ふ)

(ア) 「無比」、又「無業」同 「無類」同
タキナシ

(イ) 「交」同・日本紀
マシナシ

〔一五〕 ちちの大納言

(ア) 天武天皇元年、改御史大夫、蘇我果安、巨勢比登臣、紀大
人臣、已上三人始任大納言。

天長五年三月八日、夏野始任權大納言。

- (イ) 異朝上古、少師・少傅・少保、是云三孤(又云三少)。三公之式也(助也、副也)。故云垂相。漢以來、為御史大夫者、時転丞相、依之有垂相之号。而御史之職相当今之彈正、其義参差歟。称徳天皇御宇、暫改大納言為御史大夫。是故、大納言唐名称御史大夫。不叶旧式者也。令云、正員四人相当従三位。寛平為正二人、権一人。其後、権官加増。高倉院御宇、初為十人。

- (二六) ははきたのかたなむいにしへの人のよしあるにて

- (ア) 『後漢書』曰、「陽以博旋為徳、陰以不専為徳」

- (イ) 男は南、女は北向きに住むべき謂ひなり。陰陽につかさどる故か。よつて、貴賤共に妻室を北方と号するなり。后妃(真本号)を椒房と称するも北むきに住みたまふ故なり。云々。

- (二七) 世のおぼえはなやかなる

- (ア) 「声華」はなやか 白氏文集

- (二八) なをより所なく

- (ア) 「抛」ハナツク、又「無頼」〔真本抛依所、或本又無頼〕

- (二九) さきの世にも御契やありけむ、いときよらなる

- (ア) 君と我われいかなることを契ちぎりけん昔の世こそ知しらまほしけれ

- (三〇) きよらなる〔不本真本なるナシ〕

- (ア) 「清」なり。

- (イ) 『伊勢物語』に云ふ、「いときよらなるろうさうのうへのきぬ。云々」

- (三一) たまのおのこみこ

- (ア) 『毛詩』曰ク、「生セイ葛一束其ノ人玉ノ如シ」。又云ふ、「女有リ。玉ノ如シ。(徳如玉。箋云、徳如玉者取其堅而潔白也。)」

- (イ) 「河陽ノ花、県ハナヲ作ス。宿浦ノ玉、人ヲ為ス」李太白

- (ウ) 「玉人」ト云フ。褒美ノ詞ナリ。

- (エ) 赤玉あかの光はありと人はいへど君がよそひし貴たふとくありけり豊玉姫哥

日本紀

- (オ) 「あかたま」とは子なり。子を玉にたとへたるなり。

『日本紀』に云ふ、豊玉姫トヨタマヒメそのみこきらきらしきことをきて、「あはれ」とて、又、かへりてやしなはむと思へども、よからじとおぼして、玉依姫をやりてやしなはせ給ふとき

に、豊玉姫のみこと玉依姫によせてよみ給へる歌なり。

〔二二〕 めづらかなるちこの御かほかたちなり

(ア) 『老子』徳経曰、「法^{メツラシキモノ}物^{モノ}滋彰^{シヤウ}盜賊多有^{アリ}」。注曰、「法好也。珍好之物^{メツラシキモノ}滋生彰着^{シヤウ}、則農事^{ノウジ}廢、飢寒^{キカン}並至^{ナラズ}故盜賊多有^{アリ}也」

(イ) 「梅豆邏^{メツラシキモノ}」日本紀、又「珍愛^{メツラシキモノ}」「奇物^{メツラシキモノ}」日本紀「珍奇^{メツラシキモノ}」

遊仙窟^{メツラシキモノ}「非常^{メツラシキモノ}」同

(ウ) 神功皇后三韓をたいらげ給はんとせし時に、松浦河にて御裳をはつりてつりばりをおろして魚をつらせ給ふに、鮎^{メツラシキモノ}釣にかかれりけるを御らんじて、「めづら^{メツラシキモノ}」とおほせられけるよりはじまる詞なり。「松浦」とは「梅豆邏^{メツラシキモノ}」をあやまれり。

「めづらの川」と歌にもよめり。

(エ) 「長今^{メツラシキモノ}東南水^{メツラシキモノ}」扶紀抄、或ひは云ふ、「驚新^{メツラシキモノ}」漢語抄

(オ) 「めづらしき人を見んとやしかもせぬわが下紐^{メツラシキモノ}のとけわたるらん」古今

(カ) 『伊勢物語』に云ふ、「この御かどは^{見像、真名本}かほかたちよくおはしまして」

〔考 察〕

〔三〕 いとやむことなききはにはあらぬが（青表紙本系統・河内本系統、同。以下、青表紙本系統は青、河内本系統は河、別本は別と略記する）

(ア) 「やんごとなし」を漢字注の「無止事」に基づいて、「止む事なし」の意であると解釈しているのである。「無停事」も同じ。

『仙源抄』に、「無止事。愚案、字のままにはよむべからず。やむことなきとよむべきか。故人の口伝也」とある。『仙源抄』は長慶天皇の著書で、後醍醐・後村上天皇の所説や「奥入」「水原抄」などの先行注釈および現行の注釈を参考にし、自説を書き加えた語釈を、いろは順に配列した辞書である。よつて、「無止事」は先行注釈（以下、「旧注」と呼ぶ）の引用である。ただし、「無停事」は出典未詳。

(イ) 『万葉集』三七九一番歌の序に、
…忽值煮羹之九箇女子也。百嬌無儔花容無止。（後略）とある。

現代、『万葉集全注釈』では、右の本文に従つて、「無止」を「ヤムコトナシ」と訓んでいるが、『万葉集注釈』では、契沖の説に基づき、「無止」を「無匹」の誤りとして、これを「タグヒナシ」と訓む。

ここでは、万葉歌の用例をあげて、旧注を確かめている。

〔四〕 すぐれてときめき給ふありけり（青・河・同）

(ア) 1 「絶妙」（スグレ）は、『日本書紀』允恭天皇七年冬十二月壬戌朔の条に、

弟姫容姿絶妙無比。其艶色徹衣而晃之。是以、時人号曰衣通郎姫也。

とある。「容姿絶妙」を、現在でも、「カホスグレテ」と訓んでいる。

2 『仙源抄』に「時（トキメク）日本紀^{（イ）}」とある。

(イ) 1 この注は、「めく」が接尾語であることに気づいている説明である。しかし、この語を助詞「てには」と同様に見ているところに、まだ文法意識の未熟さがうかがわれる。

『八雲御抄』巻第六・用意部・第五「てにをはといふ事」に、「てにをは」の遣い方に関する長文の記事が見られ、鎌倉時代にはすでに「てには」の働きが文法的に意識されるようになっていたことがわかる。

2 「時」一字でも、「トキメク」と、「メク」を付けて訓む場合があることを、「生」「人」「春」一字でも「メク」を付けて訓む例を挙げて証拠立てようとしている。

ただし、現代の『日本書紀』の訓みの中にこのような用例は見いだせない。

〔五〕 めざましきものに(青・河、同)

(ア) 1 『万葉集』卷十二・「寄物陳思」・三〇六一番歌に、

五更之目不醉草跡此乎谷見乍座而吾止偲為

(あかつきの目覚まし草とこれをだに見つまいましてわれをしのばせ)

とあるが、用字法が異なる。『夫木抄』卷二十八の「目覚草」の項に同歌が収載されているから、「不醉草」を「目覚草」と表記した本があったのであろう。

2 現存の『奥入』にこの注はない。『水原抄』は散逸しているから、確かめようがないが、『仙源抄』に、「目覚、万」とあり、これは旧注の引用である事がわかる。

(イ) 1 「案之」(これを案ずるに)以下の文章は『河海抄』の著者四辻善成の独自説で、ここでは旧注を批判している。「めざまし」は「目覚まし」とは別の意味で、「眼冷(さま)し」である、というのである。

2 「詩」は一般的に『詩経』を指すが、『詩経』に「冷眼」の用例は見出せない。

「冷眼」は、冷やかかなる目つきをいう。

『白氏文集』第六・閑適、二に、「……五侯三相家 眼冷不見君……」の用例があり、「眼冷」を「メヒヤカニシテ」と訓読する。「冷眼」と「眼冷」とでは語順が異なるが、これらの語の意味と「めざまし」の語義は相似している。このような点から、著者は語の意味が時代や作品によって異なることに留意して、旧注の機械的な用例探しを批判しており、こ

こに著者の新しさが認められる。しかし、この漢詩訓読の用例に基づく反論は、「熱や気持ちの高ぶりが冷える」を原義とする「さむ」に「眼が冷やか」という意味の用例が見当たらないことから、旧注を覆すだけの説得力を持たない。やはり、この「めざまし」も「目覚まし」の派生語義で、相手がよきにつけ、あしきにつけ意外に目立つので目が覚めるような気持ちがある、の意である。(「漢字注の問題」は後で詳しく述べる)

3 「すさまじくみたる」の「すさまじ」は、接頭語「す」と「冷(さむ)」の語根から成り立った語である。ここでは、「冷ややかに」の意。これも、「めざまし」は「眼冷し」であるとする説の延長線上にある説明である。

4 「そねみたる様なる心なり」は、ことばを語義の面のみで説明する方法から一歩前進して、語の背後にある登場人物の心理まで汲み取ろうとしている注であるが、「めざまし」を、「そねみたる様」と説明すると、後続の物語本文「そねみ」と一文中で意味がダブることになり、不都合が生じる。「そねむ」は嫉妬する。「心」は「意味」の意。

〔六〕 おとしめそねみ給ふ(青・河、同)

(ア) 1 「劣」は「名義抄」に、オトル(ス) ヨロシ ッタナシ オチナシ ワロシ の訓がみえる。ここでは、「劣」を「オトス」と訓み、「おとしめ」の漢字注としている。

「陥」は「名義抄」に、オツ、オチイル、オチル シツム クホム フムイル ホヒコル の訓がみえるが、「おとしめ」に該当する訓はない。

2 傍注「猜」は「名義抄」に、ソネム ウタガフ ッラシ とある。

〔七〕 いとあづしくなりゆき(青・河、同)

底本には「あつしく」の「つ」に濁音を表す点がつけられており、この箇所を「あづしく」と読んでいたことがわかる。

この注は、まず、「あづし」と訓読する漢字を探し、その漢字の意味から「あづし」の語義を明らかにしようとしたものである。

この内、「厖」「劣」「靈運当遷」は『仙源抄』に、「劣」「厖」は『紫明抄』にすでに見えており、旧注と認められる。

ただし、旧注では、漢字と出典名のみを簡単に記載するのに対して、ここでは出典を確かめ、原文をあげているところが新しい。次に出典を再確認してみよう。

(ア)『後漢書』伝七十四

鄙諺有云、生男如狼、猶恐其厖、生女如鼠、猶恐其厖

ここでは「厖」が「あづし」と訓まれていることを例示している。「厖」は『類聚名義抄』に、ツフル アツシ ヨハシ とある。承徳三年点『大慈恩寺三藏法師伝』には、「アツシ」と訓む。

『河海抄』の本文では「恐其武」とある箇所が右の文では「恐其虎」となっている。対句表現上からは「河海抄」の本文の方が正しい。

(イ)『日本書紀』神代紀上・第五段・第十一書

是後、伊弉諾尊、神功既畢、靈運当遷。是以、構幽宮於淡路之州、寂然長隱者矣。

『河海抄』の本文では「靈運当遷」の四字を「アツイタマフテ」と訓んでいるが、旧注の『仙源抄』では、これを二つに分けて、「靈運」(アツシク)と「当遷」(アツシ)と訓んでいる。また、『日本書紀私記』(乙)では、四字を「カミアカリマシナムス」と訓んでいる。なお、『河海抄』の注では、この四字を『旧事本紀』では「ミイチツカリシマシニキ」と訓んでいることを指摘している。(ただし、天理図書館蔵『先代旧事本紀』では四字を「アツシレタマウ」と訓んでいる)

著者はこの四字の訓みに疑問を抱いているのである。現代では、「アツシレタマフ」(大系)と訓み、「靈」は魂、「運」は徙ること、「靈運」は魂がなくなること、あの世に行こうとするの意。「アツシレ」は、熱痴れの意。熱にうかされる意から、病重る意と解釈している。

(ウ)「支離(アツシ)」(弱故曰厖。順和名とあるが、これは、源順『和名抄』には見られない。「色葉字類抄」に「支離 アツシ、病也」とある。

(エ)注の意味は、「定家卿記」では「あつしく」を「あやうき」(病氣などで、生命が気づかわれる)の意としている、の意。この説は、定家の『奥入』にはない。歌論書にも見当たらない。

この定家説は文脈から語義を推量して割り出したものであろうが、物語のこの段階では桐壺更衣はまだ危篤状態ではない。そこで次のような疑問が生じるのである。

(オ)注の意味は、日本書紀の用例に従えば、「あつし」は病氣(などの)事をいうことばである。しかし、「あつし」を「病氣」といっても「あやうき」といっても、大体において同じ意味か、の意。この説は著者の独自説か。定家卿説を批判しながら、結局、定家説に妥協している。

「大都」は、あらまし。おほよそ。

現代では、「あつし」を「熱し」とし、体の熱が高いとするが、このように、素直に考えればなんでもない語義を、以上のように難しく考えるのは、著者が旧説に疑いを抱きながらも旧説を尊重する学風からまだ完全に自由になり切れていないからである。

(八) かんだちめ、うへ人(青・河、同)

(ア)『仙源抄』に「かんたちめ」の語義として「上達部、公卿」とある。貴族である『源氏物語』の読者のために、彼らがもつとも関心を抱いているのは上流階級を表すことば(上達部、上人)にわざわざ漢字注を付けるのは、このことばが著者の生きた南北朝・室町時代には、既に一般には死語となっていたからであろうか。

(九) あいなうめをそばめつつ(「あいなう」は青・河「あいなく」)

ここでも「めをそばめ」の用例を漢籍に求め、そこから語義を説明しているが、この方法は漢語に由来することばの語義を知るためにはもつとも有効である。

(ア)『史記』・酷吏伝に、

漢郅都用法嚴酷、尤不避貴戚、列侯宗室見之、側目而視、号曰蒼鷹。

とある。『河海抄』の本文とはかなり相異なる。伝本の相異か。または、『河海抄』の略記か。

(イ)『莊子』第十・胠篋に、

向無_二聖法_一則桀紂焉得_レ守_二斯位_一而放_二其毒_一使_二天下側目_一自裁とある。

(ウ)『白氏文集』卷第三・諷諭三・新樂府・「上陽白髮人」に、

…未容君王得見面、已被楊妃遥側目…とある。

(エ)『白氏文集』卷第十二・感傷四・謔行曲引・「長恨歌伝」に、

…恩沢勢力則又過之、出入禁門不問、京師長吏為之側目とある。この注は『紫明抄』に「側目也。長恨歌伝云、京師長吏為之側目」と既出。「長恨歌伝」は陳鴻の作。白楽天の長詩「長恨歌」に付された散文。

なお、傍注「無愛」は『紫明抄』に「無愛也」、『仙源抄』に「無愛也。又、無敢也。可隨所也。愚案、下尺別事也。あへなくといふ詞無敢にて侍らめ」とある。

(二〇) もろこしにもかかる事のおこりにこそ(青・河、同)

(ア) 唐の玄宗皇帝が楊貴妃を愛して世を乱した例は、『紫明抄』に詳しい。この注では、その例に限定しないで、殷の紂王が妲妃を愛し、周の幽王が褒姒を寵愛して天下を乱した例までを挙げる。

紂王が妲妃を愛した例は、『史記』殷本紀第三・同本紀第四にある。

幽王が褒姒を寵愛した例は、『史記』周本紀第四にある。

なお、傍注では、「おこり」に「起」を当てるか、「驕」(おこり)を当てるか、両説をあげている。

現代では「ことのおこり」を一語と見て、「原因」の意とする。

(十一) あめのした(青・河、同)

(ア) 1 「御宇」は孝徳紀大化元年に、「天下」は神代紀上などにみえる。

「御寓」は「御寓」(孝徳紀白雉元年)の誤りか。「御宇天下」は四字の形では見当たらない。「宇内」はない。

2 「率土」と「天表」は、漢籍語彙の訓読みを示す。いまは、訓読例を漢籍や仏典中にまで探すことをしない。理由は文末に述べる。

(十二) あぢきなう(青・河、同)

(ア) 「無道」は神代紀上に「汝甚無道」とあり、現在では「あづきなし」と訓んでいる。「無状」は神代紀上に「尽は無状」とあり、これも今は「あづきなし」とよむ。「無為」「無事」「何須」「无情」は漢籍語彙の訓読み。「無端」は仏典。〈前注(ア) 2 参照〉

(十三) いとはしたなきこと(青・河、同)

(ア) 「無半事」は『仙源抄』に、「無半(ハシタナキ)也。はしたなる女などいへるも人のたき(丈)いまだ世のつねの人に及ばざる也。中半の心なり」とある。

(イ) 同(伊勢物語)注は、管見に入らない。注(一)参照。

(十四) 御心ばへのたぐひなきをたのみにてまじらひ給ふ(青・河、同)

〔ア〕「無比」は允恭紀、「無類」は斉明紀にあるが、「無彙」はない。
 〔イ〕「交」は景行紀や孝徳紀にみえ、「マジル」「マジハル」と訓む。

「忝」は『書紀』にはないが、『伊呂波字類抄』に「カタジケナシ」とある。これは、物語本文の「御心ばえ」の上に接している「かたじけなき」の漢字注で、「交」の前に位置すべきものである。

〔十五〕 ちちの大納言（青・河、同）

〔ア〕この注は、『伊呂波字類抄』に、

大納言 淨御原天皇元年改御史大夫果安等於始為大納言

天長五年三月以夏野始任權大納言（以下、略）

とあるものを補って書いたものである。

〔イ〕この注は、『職原抄』上（大納言）に、次のようにある記事を引用したものである。（傍線を引いた部分は、『河海抄』の注と異なる箇所である。以下、おなじ）

其職掌、与右大臣以上參議天下事云々。然者大臣不候之間、奉行与大臣同。故云垂相之官也。異朝上古、少師・少傅・少保、是云三孤、（又云三少）。是三公之式也。故云垂相。漢以來、為御史大夫者必轉丞相、依之有垂相之号。然而御史之職、当今彈正、其義不叶。爰称德御世暫改大納言号、為御史大夫。是故大納言唐名為御史大夫、不叶旧式者也。令正員四人也。寛平御宇、為正二人權一人。其後、權官加増。高倉御宇、初為十人、先朝（後醍醐天皇）御時、被定六人。（以下略）

この程度の相異は、『職原抄』の写本の相異によって生じたものと推定できる。

〔十六〕 ははきたのかたなむいにしへの人のよしあるにて（青・河、同）

〔ア〕『後漢書』（皇后紀第十下）順烈梁皇后諱炳 永建三年の条に、

從容辭於帝曰、夫陽以博施為德、陰以不專為義、螽斯則百、福之所由興也。（以下略）

とある。

〔イ〕注の意味は、この（右の）文に、男は陽で女は陰とあるから、男は南（陽）に住み、女は北（陰）に住まなければならないのである。女は陰、男は陽の世界を受け持っているからであろうか。よって、身分の高い者でも低い者でも妻のことを「北の方」というのである。后妃を「椒房」（湿気を防ぐために、土に山椒を混ぜて塗った壁に囲まれた御殿に住む人）と称するのも北向きに住んでいらつしやるからである。云々、の意。文末に「云々」とある文は、引用文であるが、出所未詳。

〔十七〕 世のおぼえはなやかなる（青・河、同）

〔ア〕『白氏文集』卷第十五・律詩・「晏坐閑吟」に、昔為京洛声華客。

とある。

これも、漢詩の訓読に用例を求めたものである。「はなやか」が「声華」（世間の評判が高い）の意ならば、この語に上接する「世のおぼえ」が不用になる。「声華」は「世のおぼえはなやかなり」全体の意味に当たる。

この注も、『仙源抄』に「声華（ハナヤカナリ）」とある旧注を無批判に採録して成ったものであろう。

〔十八〕 なほより所なく

〔ア〕『名義抄』に、「拠 ヨリトコロ」、また、「無 ナシ」「頼 タヨリ」とある。「無頼」は「より所なく」の漢字注である。

〔十九〕 さきの世にも御契やありけむいときよらなる（ありけむ）は青・

河「ふかりけむ」。「いと」は、青「世になく」、河・別「よにたくひなく」。

この本文は独自異文である。

(ア) これは、『新千載集』恋一・一〇三番・読人知らずの和歌である。ただし、この和歌は、引き歌としてあげたものか、または、言葉遣いに先例があることを示す証歌としてあげたものか、あるいは、『源氏物語』の詞をとる歌の例としてあげたものか、不明。

(二〇) きよらなる「不本・真本には「なる」ナシ」(青・河、同。「きよら」は別本「けうら」)

(ア) 『仙源抄』に、「清也」とある。ただし、現代の注釈では、「きよら」と「きよげ」を区別して、前者は後者よりも一段と高貴な、本質的な美をいう、とする。

(イ) 『伊勢物語』四十一段。「ろうさう」は六位の者が着る緑色の袍。「緑衫」(ロクサン)の転。

(二一) たまのおのこみこ(青・河、同)

(ア) 『詩経』小雅二 祈父之什 二之四「白駒」に、
皎皎白駒、在彼空谷、生芻一束其人如玉。

『詩経』国風一 召南一の二「野有死麋」に、
林有樛櫟野有死鹿、白茅純束、有女如玉。(徳如玉也。箋云、如玉者取其堅而潔白)とある。

(イ) 『李太白集』巻九・「贈崔秋甫」三首中の第三首に、

河陽花作鼎、秋浦玉為人。地逐名賢好、風隨惠化春。水從天漢落、山逼畫屏新。応念金門客、投沙弔楚臣

(河陽は花を県となし、秋浦は玉を人と為す(以下、略))

(ウ) 『仙源抄』に「金子玉孫(タマノコタマノコ)などいふめり。ほめた

る心也」とある。

(エ) 『日本書紀』神代下・海幸山幸神話・第三書に、

赤玉の光はありと人はいへど君がよそひし貴くありけり

(オ) これは右の短歌の注であるが、「あかたま」は赤色の玉(明珠)で、ここでは豊玉姫の夫彦火火出美尊(ヒコホホデミノミコト)の立派さを賞賛するために対照されているものであるから、これを姫と尊(ミコト)との間に生まれた「子」のたとえと解するのは誤りである。

(二二) めづらかなるちこの御かほかたちなり(「かたち」の「か」に濁点がある。「御かほかたち」は、青「御かたち」、河「おほむかほかたち」)

(ア) 『老子』徳経第五十七章に、

…人多伎巧、奇物滋起、法物滋彰、盜賊多有…

(人に伎巧多くして奇物滋(ます)ます起り、法物滋ます彰かにして盜賊多く有り) (「法物」を「法令」とする本がある)

「注曰」は未確認。

(イ) 「梅豆邏」は『仙源抄』に既出。用例は次の注(ウ)を参照。

「珍愛」は、「珍」と「愛」のいずれも「メツラシ」と訓む。「珍愛」二字の例は『書紀』に見えない。「奇物」は『書紀』にないが、「奇」を「メツラシキ」と訓んでいるところがある。「珍奇」「非常」は漢籍用語。

(ウ) 『日本書紀』神功皇后、摂政前紀(仲哀天皇九年四月三日)の条に、
「乃獲細鱗魚。時皇后曰、希見物也。(希見、此云梅豆邏志)故時人号其処、曰梅豆邏国。今謂松浦訛也」とある。

「めづらの川」の用例は『新編国歌大観』の全索引に記載なし。

「まつうら」は、『魏志』倭人伝に「末廬」、『万葉集』に「麻都良」「麻通良」「麻通羅」「万通良」、仲哀紀に「末羅」とあるから、この神功皇后にまつわる地名起源説話はこじつけに過ぎないことが判るが、『河海抄』の著者が、『源氏物語』の注釈の本筋から離れて、『書紀』の語彙にこれ

ほどこだわって長く書いているのは、ひとつには「めづらし」は「希見」の意味であることを示す意図があつてのことであろうが、注の記述には「希見」がないところから察するに、主に著者の関心が「梅豆遷」という語彙そのものの原典探求に向けられていたからであろう。

(エ)「長今東南水」は『仙源抄』にこの注と同じものがある。ただし、『伊呂波字類抄』では、「長今」を「イマメツラカ也」と訓む。「驚新」は『類從名義抄』に、「イヤメツラシ」とある。ただし、『伊呂波字類抄』では、「驚」「新」をそれぞれ「メデタシ」と訓む。『扶紀抄』は不明。『漢語抄』は、『名義抄』に見える『楊氏漢語鈔』か。散逸。

(オ)『古今集』・恋四・読人しらず・七三〇番歌。諸本「しかもせぬ」(カ)『伊勢物語』六十五段。「兒像」は池田鑑著『伊勢物語に就きての研究』に収載されている真名本の中には見当たらない。

〈漢字注について〉

鎌倉・室町時代になると、貴族たちは武士の勢力に圧迫されて政治上の実権を完全に失ったが、それだけに華やかかなりし王朝時代に対する憧憬がはげしく、宮廷文化を固く守ろうとした。そのため、男性たちまで、『源氏物語』に興味を抱き、この物語を規範として年中行事や日常生活を行なおうとこころみだ。

しかし、平安時代の女房ことばで書かれた『源氏物語』の文章は、生活習慣の相異やことばの変化などによってすでに意味がよく判らなくなっていた。特に、学問・実務に漢字を常用していた男性の読者にとつては、平仮名書きの古代女性語を理解するのは相当に困難であつたに違いない。

そこで、彼らが豊富に持っていた漢字の知識に基づき、それを媒介として古代の女性語の意味を捉えようとした。幸いにして、平安時代に作られた『新撰字鏡』や『伊呂波字類抄』『名義抄』『和名類聚抄』などの辞書が、漢字の訓読みを記載していたので、これを参考にして平仮名に

漢字を当て嵌め、その漢字の意味から逆に平仮名ことばの意味を理解しようとしたのである。

一方、漢籍や『日本書紀』『先代旧事本記』『万葉集』などの訓読が研究され、その方面での成果が平仮名ことばの語義把握のために利用されたのである。

こうなると、漢字の訓読は正しいか、それをひらがな書きの語彙に当て嵌めて考えるのは正しいか、漢字の意味は正確に解釈されているかなど、いく重にも問題が生じてくる。たとえば、(七)の「あつし」の項にみられる「靈運当遷」を、なぜ「アツイタマフ」と訓まなければならぬのか、そして、この漢字の語義は、はたして「あつし」に相当するのか、この漢字自体の意味は何なのか、ひいては、この語の出典での意味とこの物語のこの箇所とはどのように関わるのか、などの疑問が生じる。

このような回りくどい思考の回路を通らなければ、意味不明の語を解釈できなかつたのが、この時代の学問の実態であつた。現在のように、用例を多く集め、それを分析総合しながら語義を考えていくこうとする方法は、当時その萌芽はすでに見られたとはいえ、まだ幼稚なもので、学問の方法としては確立していなかつた。

しかし、この漢字注を媒介とする方法は、漢文の音読・訓読に由来する語彙を解釈しようとするとき、きわめて有効に働くのである(たとえば、(九)の「そばめ」の項)。また、用例の少ない語彙の意味を知ろうとする時にも貴重な手掛りを提供することがある。したがって、漢字注を一概に無視することはできないのである。

ただし、この時代の漢字注には無用なもの、有害なものも少なくない。以下、その辺をよく見定めながら、検討に値するものだけを取り上げて考察することにする。

注(1)

『和歌和顯集』(三条西家本)に、
「はしたなし」とは、たらぬこともなくよきなり。なににも物の不足にたらぬをば「はしたある」と申す。(中略) 不足なきものたりたるを「はしたなきもの」といふなり。(後略)
要するに、「はしたなし」の「なし」を否定の意に解して、「はした」(不足)で「ない」、すなわち、「不足なし」の意とするのである。これは誤解で、「はしたなし」の「なし」は、性質、状態をあらわす語に添えて、その意味を強め、形容詞をつくる接尾語である。

つづく。